

理想が現実と瞬間的に戯れる教育的美学の戯画的実践

平野 隆文

Kは有罪なのか無罪なのか、Kはイノセントなのに錯綜とした司法組織の犠牲となった、いやいや、Kは一見イノセントだが、実は神の天罰が司法を通して彼の頭上に鉄槌として下ったのだ、などと言いつつ、他人を「理解」するよりも善悪の基準に基づいて他人に「判断」を下したがる人間のどうしようもない悪癖。実はこの心的傾向から宗教とイデオロギーが生まれたのだ、と、小説家ミラン・クンデラは、カフカの『審判』を引き合いに出しつつ、人間が勧善懲悪に傾斜せずにはいられないことを非難する。価値の本質的相対性を理解しようとせずに、「正義」の名の下に他者を断罪する思考パターンは、どうやら人類に普遍的に見られる悪しき傾向のようだ。

こうした恐るべき相対主義の空虚を生き抜く叡智、それこそが「小説の叡智」だと、1975年にチェコからフランスに亡命してきた作家は言う。「不確実さに耐える叡智」と言い換えてもよいらしい。だから、小説は、人間を断罪しない。人間を理解する。それまで知られていなかった人間の側面を明らかにする。それができない小説は不道徳ですらあるとクンデラは断言する。そんなこと、クンデラに言われなくとも、日本の落語を見れば（聞けば）即座に分かる。落語は人を決して罰さない。人間の愚かしさを優しく笑いに包み込むだけだからだ。クンデラ君も、ヨーロッパ中心主義から早く脱却して、ジャポニズムを取り入れ、もう一皮むけるよう努力して貰いたい、なんちゃって。

それにしても、下半身が存在しないかのように振る舞うのが、常識人の美德である。ウンチやセックスとは無縁な顔をしている人々が、昨晚や今朝、ベッドやトイレで何をしていたかを、お互いに探らないのが文明社会である。本当は常に人間の頭を占有している下半身の関心を、あたかも存在しないかのごとく振る舞わせる社会的要請。セクシャル・ハラスメントには、下半身の関心の自発的露呈により、この「偽善」をも暴露してしまう側面があるような気がする（もちろん、セクハラを擁護しているわけではない）。一方、スカトロラインで言えば、「糞」は死と再生と陽気さとエクリチュールに、実は深く関わっているのだと、ラブレールは直感し、フロイトは実感し、バフチンは同感し、アガンベンに痛感したのであった。ついでに言えば、口から肛門まで消化器という一本の管が通っている人間の形を単純化すると、当然日本のちくわになると数学者ポワンカレが考えたかどうかは知らぬが、この視点を応用すると、原理的には、何かで口を内側から掴み、肛門までずっと引っ張ってひっくり返せば、消化器官が表に、それ以外が内側に隠れる、実にシュールな人間が出来上がる。もしかしてドゥルーズとガタリの言う「器官なき身体」って、この「人間ちくわ」のことだったのか？

それにしても、江古田江古田、もといエコだ、エコだと騒ぎ過ぎではないか。僅か30年ほど前は地球の冷却が騒がれ、今は、やれ温暖化だ、CO2削減だ、

温室効果だ、「持続可能な発展だ」、エコポイントいや違ったエコポイントだ、「不都合な真実」だ（この表現は、温暖化よりもクリントン元大統領の下半身問題に、より適合する）、無農薬野菜だ、有機栽培ワインだ、と騒ぐ。フランスのジョゼ・ボヴェという農民運動家に至っちゃ、他人の畑の遺伝子交配に由来するトウモロコシを滅茶苦茶に薙ぎ倒し、近くにできたマクドナルドの店舗をぶっ壊す。グローバリゼーションは現代資本主義の最終段階だ、よって木っ端みじんにして、新しい千年王国を実現しよう、などという性急なスローガンすら耳に入る。

それにしても、うちの近くの蕎麦屋はけしからん。石油の値段が危機的に上昇したときには、たぬきそばを600円から700円に値上げしたくせに、デフレで物価が安定ないし下がる傾向がある現状には知らぬ顔の半兵衛を決め込み、値段を元に戻さない。上げた値段を下げるのは、至難の業である。でも、安売り屋はあちこちに進出していて、999円のジープンを売る企業が業績を大幅に伸ばしている。それは本当にいいことなのか？デフレスパイラルを加速させて、自分たちの首を締めているだけではないのか。

それにしても、何で今さら英語、英語って騒ぐのか。大体、英語なんぞ喋れなくても暮らしていけるではないか。それに、今ではバイリンガルも帰国子女もウジャウジャいるから、そやつらが英語に関わる仕事をすればいい（そうした仕事が今でもカッコイイと思われている我が国は、(イナ) カッペがひしめき合う島国である)。第一、赤ん坊の頃からエーゴを話していたお嬢さんやお兄さんたちには、日本のテレビしか見たことのない学生がいくら勉強しても敵う筈がないではないか。しかも、いくら英語が読めても（読めること自

体はいいが）、米国を発信源とする情報しか手に入らない。そうなると、情報が極端に偏るんじゃないのか。それより、もっとおフランス語やドイツ語や、ハンゲルやアラビア語ないしはヘブライ語などを学んで、英語以外の言語空間や認識体系に習熟すべきではないか。そう言えば、ドナルド・キーンは、ある軽薄で頭が弱めの新聞記者に「英語でお話なさった東京の知識人の中で、誰が最も普遍的だと思いましたか」という愚問を浴びせられ、「東京にはひとりもいません。四国の片田舎で、お豆腐を売っていたお婆ちゃんが人間として最も普遍的だと感じました」と切り返したという。

それにしても、キリスト教はなぜ悪魔を必要としたのか。当然、無限に善かつ全知全能の神に、この世の悪を押しつけるわけにはいかないから、「ヒール」が必要になった。ところがこの悪魔、実は遠くバビロニアに起源を持つとされる、善悪の宇宙的闘争神話に由来するという。この神話によると、善と悪の勢力争いの優劣に応じて、現世のあり方が決まってしまうという。これはどう考えても、マニ教的な善悪二元論に行き着く。だから、悪魔は結構しぶといのだ。そもそも悪が完全に滅ぶことはあり得ないと見なすのが善悪二元論である。悪魔がこの二元論の産物だとするなら、キリスト教は、大きなジレンマに陥らざるを得ない。神が無限の力を有するなら、悪魔を叩きのめしてしまえばよい。しかし、それでも悪がなくなる筈はないから、悪の責任は神に帰せられる。さあ困った。では悪魔を野放しにして悪の元凶にしておけばよいではないか。しかしこれも考えもので、じゃあ無限に善である神が、何故に悪者の跋扈を許すのか、と切り返される。悪の根源を絶てない神の力は、実は有限だという結論に達してし

まうのだ。こうして、悪の永劫回帰という、永遠の悪循環が回転し続ける。

以上は、今年「全カリ」の授業を20単位取得した平野隆文君の頭の中で、ぼんやりと生成してはどんよりと消滅していく知識と無知の混淆物である。まだ確固たる思想に成熟するにはあまりに萌芽的で、生活雑感ないしはごった煮のような掻い撫での知識を、「全カリ」を通して習得したわけだが（担当が悪いのではなく、受講生の頭が悪いがゆえの結果とはいえ）、ここに一体どういう意味を見出すべきか。もちろん、平野君の知見は多少は広がったようだから、それはめでたい。しかし、クンデラと蕎麦屋の値上げとデフレ問題とウンチとセクハラとエコ等々が雑居する隆文君の頭の中を覗くと、やはり極めて有意義な結果が得られたと持ち上げるのも憚られるような気がする。昔から、生兵法は大怪我の基とも言うので、要注意だ。オマケに平野君はオッチョコチョイのお調子者だから、ますます要注意だ。

そもそも、進学率や学力という観点から考えると、今の大学は、昔の中学か高校だと思えば、合点のいくことが多い。読み書きそろばんもかなり怪しい学生が、大教室の後方に陣取って、べちゃくちゃお喋りをしながら、パンを嚙ったりジュースを飲んだりしている（家政婦は見た、じゃなかった、私は「授業参観」をさせて貰った際にこの目で見た!）。ただし、私は大教室で、全く私語をさせずに授業ができる数少ない教員の一人であることを、ここではっきりと自慢しておく。私語をさせないこつは、私語などしている暇がないくらい、濃密かつ興味深いと勘違いさせる内容の講義を、90分間、学生に向けて「機銃掃射」すればそれで即座に実現する。言葉の銃弾は受講者の耳から突入して三半規管を揺さぶりつつ

前頭葉に達し、そこで小さな知的振動を与え続けるのだ。だから私語などしている暇はない。それでも私語をするバカがいれば、教室の外に叩き出せばよいのである。閑話休題。中学、高校の延長線上に今の大部分の大学が位置づけられるとすれば、大学の上に「巨学」でも作って、そこで学問の手ほどきをすればよい。そうすると、大学の役目は、イエスのストレイシープの喩えに倣えば、「巨学」に向く「1匹」（勉強や研究が好きでたまらない、かなりの変人）と、プロの技を身に付けた職人や、社会に出てまともな日本語の文書が書ける常識人「99匹」を育てることに存するだろう。であるならば、学士課程に於ける教養教育、などと気張る必要もなくなるのではないか。大体、「学士」とは随分おこがましい。元々は律令制の下で、皇太子に経書を講じた人間を指す官位を、今時の学生に授与するのは笑止千万である。これが「あり」なら、みんな「学士院」に入ってしまうが、それでよろしいのですかな？

それにしても立教の全カリには、「教養」を謳いながら、実は「誘導」ないし「啓蒙」を主旨とした授業が少し多すぎるような気がする。人権、ハラズメント、性の解放、ジェンダーなどなど — こうした概念を学生に吹き込むのは、一種のアンガー・ジュマンであって、歴史的検証を受けていない「今・ここ」の正義へと学生を引き込む、政治的営為である。もちろん、私は、原理的には反対ではあるものの、昨今の社会や世界的情勢に鑑みるならば、現代的課題を如何に引き受けるべきか、という主題を扱うこの種の授業の意義を認めるのに吝かではない。ただ、立教にはそうした科目が多すぎないか、と単純素朴に思っているだけだ。多すぎる結果、そこで覚えた概念や論理を悪用する学生が増殖するから困るのである。例え

ば、ちょっと叱ると「バワハラを受けた」と騒ぐ始末だし、中には「私語も人権だ」と言い張るトンデモナイ・バカすらいるらしい。兼任講師の方々の中には、「立教での授業が一番疲れる、とにかく学生が甘やかされていてやりづらい」と嘆いている方々が少なからずいらっしやるという。

「全カリ」を廃止するのが一番すっきりしている、という意見も根強くある。もちろん、廃止も一つの選択肢だ。しかし、御上（偉いお役人さま）がうるさいので、この制度は外せない、という意見も分からないではない。そこで、真の意味での「全学共通」のカリキュラムに改変すれば、まさに禍転じて福となす、となろう。話は単純だ。何せ私の言う「大学」は、あくまで「寺子屋」の延長線上に位置するのだから、「全カリ」もそれに倣う。まず、第1領域は日本語である。手始めに、全学生に漢字検定準1級の取得を義務づける（合格率20%程度の筈）。合格するまで卒業はない。さらに日本と世界の古典を（翻訳で）半年に20冊以上読む授業を必修にする。加えて、便箋3枚に万年筆で恋文を綴る古典的な代書屋の訓練が加わる。第2領域は外国語である。ただし、英語は選択でよい。必修は、アラビア語、ヘブライ語、ギリシア語、ラテン語、サンスクリット語の5つの中から1つを選び、その基礎を培う（もっとも、特別の理由ないし思い入れがあって他の言語を学びたい学生には、これを認める用意がある）。この領域では、古典的言語の他者性に内在する抵抗感を実感させると同時に（つまり、他者理解を実践させると同時に）、異質な世界を理解するのに必要な忍耐力を育てるといった副次的効果も狙う。さらに、言語そのものが巨大な文化であることをも理解させる。第3領域は『論語』である。問答無用、とにかく古典的叡智の宝庫

たる『論語』を全て暗唱させる。これなくして卒業はない。第4領域は、農業・漁業実習である。集中講義（実習）を原則とし、稲作・畜産・漁業の中から少なくとも一つを選び、2週間の実践合宿を行う（体育実技に於けるスキーやヨットは自由選択だが、以上の実習を終えていない者は履修できない）。稲作の場合は、田植えと収穫に加えて、肥料撒布や害虫駆除のためにも年に数回駆り出される。畜産の場合は、雄鶏の首を絞めて殺す練習が必須となる（猫も杓子も口にする「命の大切さ」は、「他の命の犠牲」の上に成立していることを徹底的に叩き込む）。漁業実習の場合は、様々な漁法の実践と同時に、釣ったばかりの魚の血抜きと、その3枚おろしができるようになるまで、単位は貰えない。

それにしても、冗談は休み休み言え、という声が聞こえてきそうであるが、休むことなく続けたい。これを実践すれば、立教大学は、稀有な教育システムを備えたユニークな「大学」として世界に名を轟かせ、欧米のみならず世界各国の親御さんがその子弟を送り込んでくるのは間違いない（そうなると納入される学費が増え、我々の給料も上がるぞ!）。さてさて、第5領域は計算である。ただし、使えるのは算盤のみ。3桁のかけ算10連発ができるようになるまで、単位はオアズケである（もちろん、既習者クラスもある）。第6領域は料理である。和食、洋食、中華を中心としながら、主立った家庭料理を一人で作れるようになることが、単位取得の必須条件となる。試験では、くじ引きで決まった料理を2品その場で30分以内に作らねばならない。例えば「親子丼とシジミの味噌汁」、「五目ソバと餃子」、「フォアグラ入りハンバーグとニース風サラダ」といった具合である（評価は授業態度30%、実演試験70%、

ただし、人は評価のために料理を作るのではない?!)。

第7領域は社会学習である。これは、医療・介護・被災地支援のいずれかから選択できる。医療の場合は、医学部の死体解剖に助手として参加する。また、難病と闘う人々との対話なども行う。介護の場合は、2週間の「集中」で、介護施設でひたすら無給で働く(食費は出る)。被災地支援は、その時たまたま不幸にも大きな災害に見舞われた地域や国があった場合に、そこで命をかけたヴォランティア活動を行う。第8領域は、倫理・道徳実践である。これは、道徳というより、公德心を身に付け、同時に、それを身に付けていない者を、容赦なく断罪する実践教育である。まずは自分の行動に気をつける(当たり前だ)。次に、具体的には、電車の中で化粧をしている女や、「がばい婆ちゃん」を立たせたまま、足を組んでふんぞり返って漫画を読んでいる青年を、叱りつつ説得する訓練、静かな蕎麦屋で携帯電話片手に詰まらぬことをペチャクチャ喋くりながら、ソバをズルズルいわせているオッサンやおネーちゃんたちをたしなめる訓練、電車内にて集団でマクドナルドを食っているガキどもとその親を、ぶん殴られずに済む程度に注意する練習、などが含まれる。危険を伴うが、この実習を行う前には、全員「道徳ハラスメント被害保険」に入るので、負傷しても自己負担はない。第9領域は、日本再発見である。自分とは無関係な街や村や地域を選び、そこで1週間のホームステイをしつつ、その土地柄の詳細な研究を行い、レポートを準備する。帰京後(帰袋後?)には、自分が過ごした地域の独自性、長所、短所、美点、不便な点などを、文明論や日本論や文化論のレベルと交錯させながらレポートに纏める。さて、最後の第10領域であるが、ここでは新約聖

書のどれか一章を完全に暗唱して貰う。これはキリスト教に教育理念の基礎を置く「大学」として当然のことである。ただし、アホ丸出しの口語訳ではなく、格調高い文語訳で暗誦せねばならない(「まことに、まことにあなたがたに告げます」(「ヨハネ」・X-1)とは何事だ。こんな変な日本語を喋る人間はいない。文語訳の「まことに誠に汝らに告ぐ」の方がずっと品格がある)。原則として、四福音書の何れかを選ぶように指示するが、特別な理由ないし思い入れがある者に関しては、別の箇所(例えば「詩篇」)を選んでもよい。聖書に関する知識は、今や現代人には不可欠な教養である(現代思想を「巨学」で学んで、キリスト教を脱構築する予定の者にも、脱構築する相手をまずは知って貰わねばならない)。

実は、完全な必修はこれで終わりなのだが、3、4年次に履修せねばならない選択必修はまだある。以下に列挙する(なお、選択必修は以下の5つの分野から2つを選択して履修すればよい。必修よりも、より机上の学問ないしは「巨学」のレベルに近い)。(1)表象文化系:文学、美術、建築、音楽、映画、漫画などの分析法の訓練(2)社会学系:法律学や経済学の古典10冊読破(3)歴史学系:歴史学の古典10冊読破(4)科学史系:広義の「科学」分野の名著10冊読破(5)健康の科学系:健康や病気ないしスポーツや身体論などを扱った名著10冊読破。

私の(架空の?!)「全カリ」像には、以下の特徴がある。それは(1)机上の議論を補う実地訓練を重視すること(2)今の大学は高校の延長線上にあるという認識の下に、将来の職人であれ会社員であれ自由人であれ何であれ、学生諸君全員の将来的な「基礎財産」となる経験と知識と見識とを身につけること(3)今の世に生きる困難を肌

身で感じつつ、それをある程度は抽象的レベルで普遍化する能力を培うこと、そのために読書を重視すること、の3点に集約できるであろう。

今まで些か挑発的に例示してきた、そしてまずは実現不可能であろう「実践教育」が、日本中の大学の教養教育に見られる、一見華やかだが、かなり統一感に欠けるメニューの繁茂とその虚しさを、多少は浮き彫りにできただろうか。そもそも、教養なんぞ、人様から戴くものではない。能動的な読書や友人との議論や様々な人生経験などを通して、勝手に切り開いていくものである。私が大学院に「入学」した頃、その主任教授だったK先生はこういう嫌みで我々にジャブを見舞った。「昔は、文学研究といえば、金持ちのボンボンの特権だった。本来は自分で稀覯本も買えないようなヤツの来るところではないのだ。まあ、時代の流れだから仕方ないけれど、とにかく、最近は何んぞ貧乏人ばかりが文学をやりがあって、実に困ったもんだ。それでも、皆さん、『入院』おめでとうございます、と言わざるを得ないのでしょうかなあ。」さらに昔のこと、X教授は、授業にほぼ皆勤の院生をからかってこう言ったという。「君、こんなに頻繁に授業に出て、一体いつ勉強しているのかね?」。本当の大学（「巨学」）レベルであれば、教師のレズン・デートルは、「書誌」ないし「ビブリオ」をタダで配ってくれる点にしかない。授業に於ける教師の話なんぞ、ごく一部の例外を除いて、「尻のカッパ」と見下すのが、一昔前までの生意気な大学生の特権であった。

読むべき本とは何か、ひいては、解説すべき政治や経済あるいは社会の問題とは何か、その鍵を提供するのが大学の役目であった。今後「巨学」はさらにその上をいくだろう。大学は、「今ここ」に投げ込まれている若者相手に、

有意義に生きる上での技能と知恵と知識を提供せねばならない。そのためにも、カントが第2の脳と呼ぶ、「手」ないし「指」を動かす実践的教育が不可欠である。同時に、俗悪で無思想的な空気や雰囲気と距離をとるためにも、できれば自己を相対化する視点を、読書を主軸とした教育の充実で、学生に獲得してもらいたい。

最後に、現行の「全カリ」に関して一言だけ。「全カリ」で授業を担当する教員は、専門領域で優れた業績を挙げている教員に限るべきだと思う（もちろん、私を除けば、立教の教員は皆さん全て超一流だと思いますが。それにしても分かり易すぎる謙遜だな、こりゃ!）。いかなる分野であれ、その専門の先端を走る者しか、「教養」に資することはできない。深い専門的知識を持つ者のみが、それを「教養」に変換ないし還元（換言?）できる。そういう意味では、専任教員が研究活動に専念できる環境をもっと整えるべきである。しかし、だからと言って、専任が「全カリ」を支えるという理念には、必ずしも賛成ではない。専門の授業に加えて、様々な校務や会議に縛られている専任教員が、「全カリ」を支えるという発想は、実質的には、専任の士気を著しく萎えさせるような気がする（ここは大いに議論すべき点だろう）。従って、一案だが、サバティカル方式にしてはどうか。つまり、7年に1度、その間に蓄積し深化させた専門的知識を、半年間教室の中で易しい言葉に変換し続けられればよいことにする。この措置により不足するであろう人材は、優秀な兼任講師に任せる（そのために、人選は業績を見極めて慎重に行う）。因みに、私は大した業績もないので、「全カリ」を担当できる「玉」ではないことをここに高らかに宣言するものである！（「こら、ふざけるな、そんなこと宣言する

なら、お前の「玉」を二つとももぎとってしまおうぞ」という声が一瞬間こえたような、聞こえなかったような)。

以上はもちろん大法螺である。それにして、この壮大な法螺話にここまで付き合ったださった読者の皆さん、偉いヒマでおますなあ！何なら、来年度の「全カリ」、担当して頂けますう～？おっとまた口が滑った。とにかく皆さまの無駄な時間を頂戴したこと、ここに深くお詫び申し上げます。

で、これで終わりにしようと思ったのですが、画竜点睛を欠くような気がしますので、一言付け加えます。フランス文学専修の同僚たちは(知的で優しくかつムツリスケベ、と3拍子揃っている方々です)、傍若無人で挑発的な文章しか書けない私に呆れ果て、何度注意しても、全カリ総合や英語およびその他の言語の教育に真剣に従事なさっている先生方の神経を逆撫でするような文章を捻り出し続ける私に、執拗に警鐘をならし、書き直しを指示して下さいました(レポート試験100%の世界です。何度も落第しました)。お役人が読んでも「よくできました」という太鼓判を押してくれるような文章を、頭のチャンネルを切り替えてテキト～

に作文できない私のような教員なんぞは、実は無能だと悟らされました。よって、平野は「全カリ」で文章作法を学んで出直して来い、という結論に至りました。よってよって、2011年度より「官僚的文章作成法」という授業を「全カリ」に設け(もちろん講師は現役の官僚の方々をお願いする予定です)、平野はA評価以上が取れるまで、同授業の履修が義務づけられることになりました。皆さま、この厳しい現代社会に生きる上で最も重要な能力の一つ、すなわち時には本音を悟られない文章作法を身につける術を、私も身につける必要があります。教室で皆様方にお会いしたら、官僚式のご挨拶や話題で、その場がひたすら和むように相務める所存でございます。

この文章には、不適切な箇所が多く見受けられたかもしれませんが、まだ成長途上の一学徒の、未熟な「暴言」として、どうかご海容くださいますようお願いする次第です(って書くのと、結構官僚的ないい文だったりして！おっとっと、これまた口が滑って失礼いたしました)。最後になりましたが、皆さまのご健康と益々のご活躍を心より祈念いたします。

ひらの たかふみ

(本学文学部文学科フランス文学専修教授/
全学共通カリキュラム運営センター
総合教育科目構想・運営チームメンバー)